

いばらきけん お み た ま し り つ み の り ち ゅ う が つ こ う
学校名 茨城県小美玉市立美野里中学校

校長名 廣戸 隆

所在地 〒319-0132 茨城県小美玉市部室1196番地3

TEL 0299-48-0128

FAX 0299-48-0923

E-mail 610801@sch.ibk.ed.jp

URL <http://city.omitama.ibaraki.jp/minori-j/>

1. 研究主題

「基礎的・基本的な運動の技能や知識を活用する力の育成」

—学び合う活動を生かした指導方法の改善—

2. 研究の期間

平成24年度～平成26年度 3年間

3. 研究の目的

本校では「豊かな人間性と確かな学力を身に付け、社会的に自立した生き方のできる生徒を育成する。」を学校教育目標に掲げ、教育活動を実践している。各教科指導においては、思考力・判断力・表現力・コミュニケーション能力の向上を図るために、「学び合う活動」「交流」「つながり」をキーワードとした授業づくりを推進している。

本校の生徒は、運動やスポーツが好きで、体育の授業を楽しんでいる生徒が多く、進んで運動に取り組むことができている。一方で、運動やスポーツをすることが得意ではないと思っている生徒が多く存在することから、生涯にわたって運動に親しむ実践者を育成するためにも、「できる」「分かる」「かかわる」楽しさを体験させ、運動に対する有能感を高めていく必要がある。また、授業においてグループで思考を深める場面では、習得した運動の技能や知識を活用して課題解決にあたる姿が十分にみられないことから、観察し合ったり、話し合ったりする認知的学習場面を意図的に取り入れ、肯定的なかかわり方を重点的に指導していく中で「活用する力」を育てていく必要性を感じている。

以上のことから、本研究の目的は、学び合う活動を生かした指導方法の改善を行い、「できること」「分かること」「かかわること」をバランスよく組み込んだ授業を展開し、生徒が基礎的・基本的な運動の技能や知識を確実に習得して、運動の楽しさや喜びを味わえるようにすることである。そして、習得した力を活用し、自信をもって運動

に挑戦したり、自らの運動の課題を解決したりできる生徒を育成することである。

4. 研究の方法・実践内容

研究の組織として、研究推進委員会と授業研究部、環境・調査研究部を置き、研究仮説の検証を行った。以下のような2つの視点から研究を進め実践を積み重ねていけば、「基礎的・基本的な運動の技能や知識を活用する力の育成」が具現化するであろうという仮説を立てた。

研究の視点1「協同的な学びを通してコミュニケーション能力を育成する」

研究の視点2「認知的学習を通して論理的思考力を育成する」

検証の方法として、授業に関するアンケート調査や学習カードの記述、授業評価の分析等を行った。

(1) 平成24年度の主な取組

①学習形態の工夫

視点1に迫るための手立てとして学習形態の工夫を行った。第2学年のマット運動の授業では、ペアでお互いにアドバイスし合いながら、課題を達成するために協力し合う学習を進めた。基礎感覚づくり運動や発展学習などで、毎時間、お互いのがんばっていたところや上達したところを伝え合ったり、改善点を話し合ったりした。また、2人組によるペア学習での話し合いだけでなく、4人グループになり、自分たちで考えた技のポイントや運動のコツを情報交換する場を設けた。

(2) 平成25年度の主な取組

①態度の学習内容の明確化

視点1に迫るための手立てとして態度の学習内容の明確化を図った。第1学年の創作ダンスの授業では、学習目標や学習の流れ・内容が分かるようなキーワードを掲示し、学習の見通しをもたせるようにした。技能の目標

に加え、「仲間のよさを認め合おう。(笑顔、拍手、言葉かけ)」といった態度の目標を提示し、目標を達成するには、どのような行動が必要なのかを意識させた。

②学習カードの工夫

視点2に迫るための手立てとして生徒と教師の双方から思考・判断が見取れる学習カードの工夫を行った。動きのスケッチや仲間からの言葉を記録し、次回の学習に生かせるようにした。また、「ベストパフォーマンス」を選び、仲間のよさを相互評価するようにした。学習課題や活動について振り返り、「どうして」「どうすれば」「どんな」につながる内容を記述させた。

(3)平成26年度の主な取組

①人間関係づくり

視点1に迫るための手立てとしてあたたかい人間関係づくりに努めた。第1学年の創作ダンスの授業では、授業の導入場面で「MINORウォーミングアップダンス」を行った。ペアや4人グループで行い、音楽に乗せて心と体をほぐし、仲間と楽しく活動することができるようにした。

②学習形態の工夫(カルテット学習)

第1学年を中心に、男女混合4人グループで授業を行った。ダンスにおいても、男子の力強い動き、女子のやわらかな動きなど、それぞれのよさを参考にできるようにした。同時に日常生活での男女間のコミュニケーションをより円滑にできることもねらいとした。

③課題提示や発問の工夫

視点2に迫るための手立てとして「どうして」「どうすれば」「どんな」をキーワードに思考を広げたり、整理したりすることをねらいとした発問を準備した。体育理論の授業では、プレゼンテーションソフト(パワーポイント)を活用し、ワークシートと対応させて課題提示や発問をするようにした。

④効果的な話し合い活動

視点2に迫るための手立てとして話し合い活動の仕方を工夫した。ワークシートやICT機器を活用し、学習課題に迫れるようにした。第1学年の体育理論の授業では、ブレインストーミングや分類、順位付けなどのグループワークを取り入れ、知識を活用して思考を深められるようにした。

5. 研究の成果

- 学習形態を工夫し、4人グループを基本形態として授業を行うことで、生徒は仲間の動きや考え方のよさ、あるいは違いに気付きながら学びを深めることができた。
- 体ほぐしの運動やダンスの授業でペアやグループで動きを合わせる、対応させるなどの運動を行うことにより、仲間と協力したり、助け合ったりする楽しさや心地よさを体験させることができた。生徒のあたたかい人間関係をつくろうとする態度は、コミュニケーション能力の向上につながった。
- 学習カード(ワークシート)やICT機器の活用をして話し合い活動をしたり、ブレインストーミングや順位付けなどのグループワークを取り入れたりしたことで、生徒は学習した技能や知識を活用して課題を見付け、課題に応じた取り組み方ができるようになった。
- 生徒と教師の双方から思考・判断が見取れる学習カードの工夫を行ったことにより、生徒は前時の学習内容を生かしたり、課題解決の方法を考えたりできるようになった。また、学習課題や活動について振り返り、「どうして」「どうすれば」「どんな」につながる内容を記述させることで言語活動の充実が図られ、論理的思考力を高めることができた。

6. 研究の意義、発展性

男女混合4人グループやあたたかい人間関係づくりを重視した協同的な学びや観察し合ったり、話し合ったりする認知的学習は、コミュニケーション能力や論理的思考力を高めるのに有効であることが分かった。このことは、学び合う活動を生かした指導が、基礎的・基本的な運動の技能や知識を活用する力を高めることを示唆する。

今後、生徒同士のかかわりがうまくいかない場合の手立てとして、発問や言葉掛け、場の工夫の視点から一斉に指導する内容と個別に支援する内容を検討し、指導を充実させていく必要がある。そうすることで、生徒の学びが一層深まり、基礎的・基本的な運動の技能や知識を活用する力が、健康で豊かなスポーツライフを実現させる力となり、体育・保健体育科の究極の目標である「明るく豊かな生活を営む態度」を育てることになると考える。